

【個人】

提出 平成30年11月29日

山行報告書

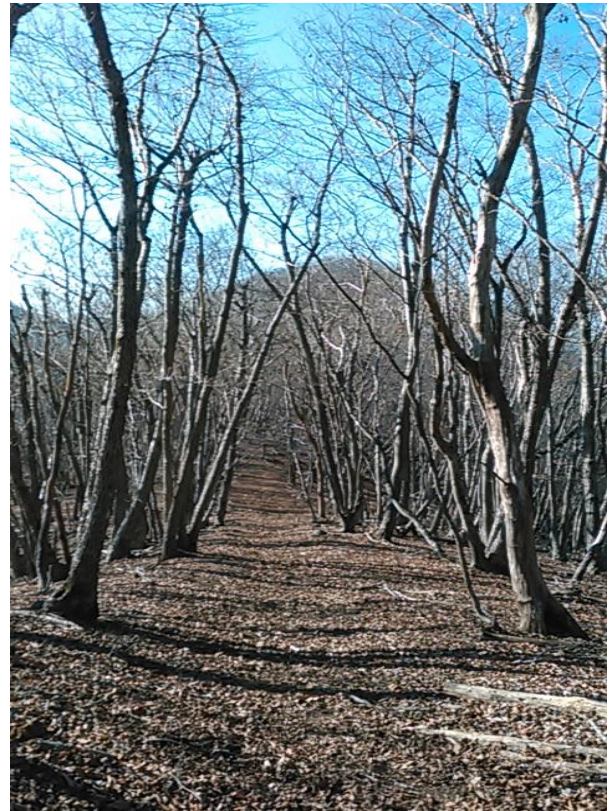
山行報告者：加藤

山域・山名：寂ショウ尾根～大谷ヶ丸 (1643.8m) (山梨県大和町)

入山日又は期間：平成30年11月27日(火) 日帰り

参加者

加藤 1名



天候 快晴

(⇒コンドウ丸から尾根道を下る)

11月27日
(火)

5:10 南浦和駅から武蔵野線乗車～西国分寺で中央線高尾行に乗り換え～
6:14 高尾駅で中央線松本行に乗り換え～7:06 笹子駅で下車、甲州街道を
車道歩き 30分桜公園で身支度、7:50 寂ショウ尾根から登山開始→9:10
ブナの大木で休憩⇒11:00 滝子山山頂通過⇒11:50 大谷ヶ丸着、昼食⇒
12:10 出発⇒12:50 コンドウ丸通過⇒13:15 曲沢峠通過⇒13:50
大鹿峠着、休憩⇒15:45 笹子駅着～16:20 高尾行の電車に乗車

装備と食料

個人装備：ヘッドランプ、雨具、防寒衣、コンパス、地図、着替え、スパッツ、テルモス
サングラス

個人食：昼食、行動食、茶、湯

次ページへ

この山に来ると、いつもいつも空ばかり見ながら歩いている。

特に寂シウ尾根からのこの道は、最初ほんのわずか山腹を詰め上げただけであとはひたすらヤセ尾根をぐいぐい登っていくので、両脇の谷間の広葉樹林の梢を下に見る格好になる。

そうして春は新緑の青、秋は紅葉の錦の梢の海を分けて紺碧の空目指して助走していく。

尾根の途中にお気に入りの大きなブナの木があって、登り始めて小一時間ほどでここで最初の小休止を取るのが私の決まりだ。谷間へ突き出した枝（と言っても私の胴より太い）に腰かけて、足をブラブラして何となく寄りかかっているだけだが、懐かしい友人とでも話をしているような気持ちになる。キリッと締まった風が、陽の光に温まった尾根と私を吹き抜けていくのがいい。この山が好きで好きで、以前は年中を通して毎月登りに来ていたが、今年は4月に来たきりで夏の間は気持ちがずっと南アルプスへ向かっていた。だから、「ただいま」という気持ちが自然に溢れてきた。

でもこちらがどんなに思い入れを強くしても、山は無言で命の輪っかを回し続けるだけなんだが…。それだからだろうか。この「優しさ」は計り知れない「大きさ」に繋がっていく。

尾根の中ほどからいきなり岩登りが始まる。岩をつかみ、木の根をつかみ、足先指先の「目」がおもむろに開いていくのを感じながら無我の境地で岩肌に道筋を見出していき、そんな、体中の細胞が覚醒するような感覚を初めて味わったのがこの山だった。どんなに体が岩に慣れていっても、その「恐怖」を感じる感性は失わずにいたい。だからこの日、何も考えずにひょいっと難所を抜けた後、「おい！」と何度か自分を叱った。何度も何度も叱った。しまいには「大丈夫かお前!？」と立ち止まった。慣れは怖い。しばらく来ない間に、なんだか今までとは別の課題が生じてしまっている。「小僧、思い上がるなよ」と、頂に雪煙をなびかせた富士山がじっと見ていた。自戒、自戒、である。滝小山山頂直下の鞍部で小休止を取り（ここは春になると、一面スミレの花で埋め尽くされる）、山頂を通過、反対側から上がってきた一組の夫婦とすれ違い、大谷が丸方面へ道を分けていく。山容がガラリと変わり、片面は間延びした等高線ののっぺりとした針葉樹林、片側は雪庇のように滑らかにえぐれた谷筋が連続して突き上げてくる、その「雪庇」の上の道を進んでいく。ここはもう完全に熊の生活圏内なので、そここのミスナラの幹に子熊の遊んだ爪痕が残されている。気のせいかな、今年は新しい爪痕が少ないような気がした。生木をえぐって帯状につけられた最新の爪痕を見つけて、じっくり触ってみる。なんて力なんだろう、と思う。

うちの猫の爪とぎとは迫力が違いすぎる。素人目に見て、熊が好んで爪を立てる木は、まずゴワゴワした太い幹であること、樹皮が厚い層状になってたっぷり水気を含んでいること、根元が大きく広がっていて心ゆくまでひっかき続けられる(?)こと、が重要らしい。ひっかきにひっかいて楕円形にきれいに樹皮がえぐられた大木を見ると、これをがりがりやっている子熊の真剣な目つきや、ひっかき残しがないか丹念にチェックする親熊の研ぎ澄まされた鼻づらや、2,3m離れて楕円のバランスをじっと見つめる兄弟熊達の張り詰めた息遣いが、ピリピリ伝わってくるのである。朝もやの中で、あるいは明るい月夜の晩に、彼らは静まり返ったこの深い森の奥で盛大に腕を磨いているんだろう。ちょうど昼時に大谷ヶ丸に着き、熱々の昼食を食べながら、遠くに冠雪の南アルプスの山々を眺める。山歩きを始めたばかりのころ、初めてここから南アルプスを目にした時、いつかあの山々を歩こう、と自分に誓った。それから数年、今年ついにその夢が叶い、そうしてまたここに立ち返って眺めてみると、もう感無量、言葉がなかった。こうしてみると、今回の山行はなんだか原点回帰のような印象だった。たった一日の日帰りで、随分いろんなことを考えた。これまでの山も、これからの山も。そしてまた来月、私はここへ来るんだろうな、と確信しながら、長い長い明るい尾根を下って帰った。